

出題分析			
試験時間	90分	配点	80点(Writing込)
		大問数	3題
分量 (昨年比較)	[減少]	同程度	増加
		難易度変化 (昨年比較)	[易化] 同程度 [難化]
<p>【概評】</p> <p>Reading は例年通り長文読解問題 3 題の構成である。大問Ⅱに新形式の設問が導入されたほかは、出題形式に大きな変化は見られない。題材に関しては、アカデミックかつ抽象度の高い英文が並んだ。本文の分量は昨年に比べて減少したものの、文章自体の難易度が高く、内容把握に時間を要する。もともと国際教養学部のリーディングは語彙レベルが高く制限時間も厳しいが、本文の難解さゆえに受験生の負担は増しており、昨年に比べ難化したと言える。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	長文読解 (「何もしないロボット」が問いかけること)	昨年は除外された (3) 内容不一致文選択問題が復活し、(1) パラグラフの要旨選択 (2) 同義語選択と合わせた 3 問構成となった。紛らわしい選択肢はほとんど見当たらず、また大問 3 問の中で最も内容を掴みやすいため、ここで得点を稼いでおきたい。	標準
II	長文読解 (フラクタル幾何と海岸線の測定)	(1) パラグラフの要旨選択、(2) 内容不一致文選択、それと従来の同義語選択問題に代わりに語群選択式の空所補充問題が(3)、(4)として新設され、4 問構成になった。設問は比較的素直だが、本文は数学的概念を図やグラフなどの視覚情報なしに文章のみで理解する必要がある、受験生には非常に厳しい内容であったと言える。	難
III	長文読解 (西洋と東洋における「自然」の概念の比較)	出題形式は (1) パラグラフの要旨選択、(2) 内容不一致文選択、(3) 同義語選択と、昨年度と同様である。(3) は 4. material の選択肢が紛らわしい。英文には受験生には馴染みのない専門的な単語が多用されており、かつ選択肢と本文を丁寧に照らし合わせる精密な読解が求められた。	やや難

合格のための学習法

早稲田大学国際教養学部の問題は、読解問題の英文量が多く、本文や選択肢の語彙レベルが高い傾向にあるため、英語を読むこと自体に抵抗がないことが最低条件である。日頃から長めの英文を読み、分量の多い英文を集中して読めるように訓練するとともに、文系・理系を問わず様々なテーマに触れて語彙力をつけておくことが必要である。また、例年パラグラフの要旨を問う問題が出題されるため、日々の学習の中でも要点を整理しながら英文を読むくせを付けることが望ましい。